

同人誌「胎動」より

転載

ある少年との実験 たなか踏基

発行所：新潟大学工学部胎動編集局
平成十五年三月改題加筆修正版

春の彼岸が過ぎ、櫻の便りがちらほら聞かれる三月中旬から四月上旬までの季節は、東京人にとっても特別の季節となる。東京が、別れと出逢い、終わりと始まり、入学と卒業、就職と転勤、上京と旅立ちを演出する人生の大舞台となるからである。三月上旬、南の櫻前線が北上し始めると、上野寛永寺、新宿御苑、墨田公園、三鷹市の旧多摩川浄水堤や井の頭公園等の東京の櫻の名所が、老若男女でだんだんと賑わってくる。ちなみに氣象学的には、櫻の種類を染井吉野に限定し、その平均開花日が同じ地点を結ぶ線を櫻前線と呼ぶのだそうだが……。

はまさに春爛漫である。お堀の水面に張り出す櫻の樹木は、まるで演技を終えた舞姫が身体を投げ出して床に臥すさまに似ている。八重櫻の匂いたつような妖艶さ、平安時代の幽玄な趣と異なり、むしろ山櫻の清楚で優しい隠れた女の情念を通わせる。とりわけ私が好きなのは、曇天や小雨の日の、千鳥が淵の水面に散る櫻である。まるで喜びも悲しみも一緒にして、ただひたすら散っていく花弁のはかなさに、自分の心を投影できるからかもしれない。この時季、櫻の魔力にとり憑かれて、櫻前線を追い駆けるカメラ片手の旅人も多いが、私はそれ程の櫻フリークではない。唯ここは他の場所と違って、カラオケもゴザの宴会も屋台も御法度なので、ひたすら佇んで、一人静かに櫻を愛でながら、物思いに耽る格好の場所だからでもある。

健全で常識的な理性を働かせることでその男を諦められたら、幸福だったかもしれない。幸福というよりも、無難で安全であったと言い直すべきかもしれないが……しかしそういう訳にはいかなかった。若い男には、不安と混乱の危険性を含んだ未知なる魅力、そのくせ母親の幻影を引き摺る未成長な中途半端な魅力がある。その男が多感であればあるほど、その魅力は輝いて見える。内部に潜在するものが、表面に湧き上がってキラキラする輝きとなつて見える。例えば、力を込めて身体ごとぶつかつてきたドアには、実は鍵が掛かつておらず、はずみを喰らつて部屋の中に飛び込んで赤面している無様さを観れば、思わず頭を抱えて懐で温めてやりたくなるような……

おまえはそんな感情を私に起させていた。一目観て恋をした。私は、おまえの性格や生活を知らないうちに、一目の邂逅で捕まってしまう。軽薄で安易な一目惚れと軽蔑されても仕方がない。それまでの私の生活からは、そんな未来を推測させる兆候は微塵もなかったのだから。でも軽率な第一印象偏重の傾向は、不思議な女の特長技能と男は非難するけれど、一般的に女には第一印象、いわゆる一瞬の目の閃きに決められた感情を読み取る才能にかけては、先天的に男より優れたものを持っているのではあ

四十一年前の話である。自分より年下の男を恋してしまった女が、

居の石垣には三百本に近い山櫻が咲く光景

私は、人間の欲望や意志が普遍的なもので、またそうでなくてはならないと考えてもいなかった。別に、中高年過ぎて年中愚痴をこぼし合い喧嘩しながら、糧と情性のために繋がっている忍従の夫婦関係に幻滅していたわけでもない。誰かが誰かを好きになつて、独占したくなり、その欲望を結婚という形式で正当化するのには確かに人間の知恵である。でも何故結婚後にやってきた恋愛が、浮気や不倫として酷評されねばならないのか、結婚をもたらしした恋愛よりも、結婚後にやってきた恋愛の方がはるかに人間にとつて意味があることだつてあるに違いない。結婚が原則として解消できぬものとして、取り決めた人間の知恵は正しかったのであろうか・・・と。

東京での実験を日夜繰り返している内に、何時の頃からか、そうした意固地な杞憂が私の胸の中に渦巻くようになっていた。

そうした社会通念上の成約を疑いだしていた頃の私は、東京の生活にもすっかり慣れて、もう直ぐ二十五歳に手が届きそうになつていた。私は、その頃演劇仲間と一緒にダンススタジオにいた。この仲間の特定の誰かに興味を抱いていたからではない。正確に言えば始めは、四人で一緒にダンスを習う過程で確かに惹かれる男もいたのだが・・・演劇の理論ではAに叶う者がいな

かった。ダンスが上手く演技力ではBが優れており、イケ面で女にもてるC、演出をやるCに対しては誰もが尊敬の念を抱いたが、もはや私を引き釣り廻す程の魅力を無くしていた。男達はいずれも、女がそういった能力や知識に惚れ込むものだと思つていたのが見え見えで厭だつたからだ。他の女達ならいざ知れず、この私に限っては違ふ・・・と彼等に対して何処か対立めいた気持ちで接していたのかも知れない。

演劇とダンスは、私が何時からともなく感じ始めていた都会の「虚」を癒す役目を果してきたようだ。生活の「嘘」は図書館の仕事帰りも、部屋に戻ってきてからも毎日憑いてきた。寂寥感といつても良い。人間らしく充実した時間を持ちたいという感情が、情性に流され誇張された心の間隙をぬつて、突如として突き上げてくる、なす術なく逡巡してしまう。例えば、こんな大勢の人間が東京にいるのに、心を許せる友人が一人もできないといった感じである。図書館の周りに集まってくる学生達や教授連、そして通俗的な事務官、これが一本本に学問の府に生きる種族であろうか。何等思想もなく、自分を消費することに忙しく毎日を情性で送っている。何かを創りだそう。旧来のものとは別の何かを自分等が創りだせて、また創りだして行く責務を

放棄してしまつた頭でつかちの種族。なら、予先を自分に向けた時の失望感、焦燥感・・・そういった感情の追いつきに居たたまれなくなつていたので、確かに演劇仲間と近づき、ダンスを習得出来たのはひとつの変化であつたのだが・・・

階段を下りた広いホールの中程に大きな四角い柱があつて、カップルはそれを避けるように左回りで踊つていた。すでに幾組かの男女がバンドに合わせて踊つていたが、フロアーは空いていた。五人編成のバンドのアルトサククスはかなりの腕で、音色が渦を巻いて吹き上げるように鳴つていた。管楽器を吹くその奏者は、曲目によりサククス、クラリネット、フルートを器用に使

い分けた。「踊ろう！」
Aが強引に私の手を手繰りこむように引いた。都会育ちのAは私の身体を抱くと、いかにも女の扱いは心得ているという風な素振で私をリードした。タンゴのリズムは扇情的で歯切れ好いのだが、バックコルでもチェスターンも控えめで行儀よかつた。私はAのなすままに任せた。私の背中に回した手を、上下に軽く動かすように愛撫して、耳元に口を寄せAがファイヴステップを踏みながら囁く、

「今日は動きが軽いネ！ 踊り易いよ。」
「そう・・・」

私は、当たり前という風に冷静を装う。

Aは腰に廻した手をぐつと絞り上げるように刺激した。タンゴが終わると、Aの微笑に對して私は実験でお返しをする。演劇仲間の二人の男の眼が、Aと私を迎えている。嬉々とした私の表情は実験の所作なのだが、男達はそれと気付かない。AとCは、今度は夫々お目当てのダンサーを誘う。すっぱりと彼女等の身体を抱きすくめるように踊っている。女達は、これまた男の右肩に顔をもたせかけている。私と踊るより彼女達の商売上の媚が、男達を喜ばせているのは明瞭だ。今度はダンス得意なBが私を誘う。コントラチェックから立ち上り、カーブドフェザーに移行するBのリードは華麗だった。Bの巧みなりードが、私の身体を昂揚させる。ワルツのダブルリバースターンは、私の好きなステップだったからだ。股に挟み込んだBの左足が、私の身体を持上げるように反時計方向に二回転させると、紅いフレアスカート裾が華と舞った。私は無意識に上半身を反らせ、遠心力で周るお互いの回転を助ける動作をしていた。曲は、フロアーの空気を掻き混ぜるような、テナポのジルバに変わっていた。

私は、フロアーで踊る若い一組の男女に

気付いた。若いカップルは体操の選手のようにジルバを無造作に踊り、大輪の造花をフロアーに何回も咲かせた。フロアーの一角に空間が開けて、ギャラリーの視線を一点に集めていた。更にアップテンポの曲に変わると、酔っている風だったが、その少年はリズムミカルなツイストを一人で踊りこなし。私とその華奢な少年に注目したのは、身のこなしの端麗さのためばかりではないように思う。何か今迄見えぬ赤い糸が、急に繋がるような、不思議な因縁めいた感情だった。その少年が、フロアーに出てこなくなると軽い失望感を覚えた。演劇仲間も少年達に気付いていたらしく、珍しく感懐をこめて言葉を吐いた。

「若いってことは、素晴らしいなあー」

話題は、しばし自分等の若い時の思い出話、高校時代から中学時代にまで遡った。そこには大人に成り切れない半端な仲間同志の自負心と、過去を懐古するちぐはぐな空気が淀んでいた。私は、演劇仲間と相槌を打ちながら、少年が暗闇の奥に再登場してくるのを期待して眼を凝らしていた。

突然フロアー上に浮かび上がったおまえを発見すると、どぎまぎした。きつとなつておまえが私の方を凝視していた。いや観ているように思えたからだ。しかも暗闇か

ら浮かび出た顔が、フロアーを横切つてふらふらと漂いながら、私目指してきたからだ。おまえの拳動を絶えず気を配っていない。そうしておまえは、一直線に私達四人の座っているカウンタに近寄つてきた。ひどく酔っているのが判った。酔いのため青ざめて、青白く凄みを増してくるような顔だった。おまえは苦しそくに、上着のジツパーを押し開くと、私達に割り込んできて、カウンターの縁にかるうじて手をついた。

最年長のAの揶揄するような口調だ。

「坊や 酔っ払ったなー 飲みつけない

酒をのんで・・・」

「何おー 飲みつけない！ こんなもの

何時も飲んでるワイー！」

明らかに虚勢を張つた少年の台詞だった。

「ほらー 水でものめよ。」

ダンス得意なBの滑らせたコップの水をおまえは一気に飲み干し、肩で大きく息をついた。肩で息をしながら、おまえは私を発見すると、今度は私の顔をまじまじと酔眼で見詰めた。手にしていたコップをカウンタに置くと、そのまま身体をよるめかせてぺたんとな床にしゃがみ込んだ。手から離れたコップが、はずみで床に落ちて砕けた。床に倒れこもうとする刹那、私の膝を掴んで自分の身体を支え、そのまま私の膝

に頭を押付けてきた。イケ面のCがおまえを助け起しに掛かった。

「ノビちゃってー、ツイスト・ボーイもだらしがない！ ほら掴まれ！」

どぎつい化粧の年増女が一人、慌ててとんできた。先程のジルバのパートナーではなかった。

「またダメー お客さんに迷惑かけてー」

「・・・」

「どうもすみません！スカート汚れませんでしたか？」

おまえは私の膝に頭を押し当てたまま、いやいやするようにして応じない。その女がおまえの背後から抱き起こそうとし、男達もそれに加勢する。おまえは、そうされればされるほど、駄々子のように、私の膝を挟みこむようにしがみ付いてくる。

「困るわあ！」

私はその時おまえが泣いているのに気付いた。おまえの涙が、スカートの布地に沁みて内腿を湿らせた。それは、ひたひたと身内に溢れて満ちてくるような、いい知れない唐突な潮だった。

少女時代の実験で、自分の表情を制御できたから、役者に向いていると思ってきた。でも私は二年間付き合った、演劇仲間とは

次第に疎遠になった。私がもう演劇を止めたいと仄めかした時、「君みたいに才能がある人が、止めるのは実に惜しい。」等と仲間はおべんちゃらをいった。

鬨りのある甘いマスクで、風貌も体軀も少年のように華奢だったおまえが、美容師つまり女性を顧客とするヘヤーデザイナーだったとはとても信じられなかった。だって、出会いが余りにも子供じみていたし、業界の常識を欠く行動だったからだ。女客相手のサービスマンの美容師が、例え酔っ払ったとしても、見ず知らずの女の膝に頭を押し付けて泣くだろうか・・・でもおまえはそれを平気でやった。だからこそ、抱擁する私の腕の中でおまえはぬくぬくと温まっておられたのだ。

秋始め、その日は土砂降りの雨だった。傘を持たなかった私は、びしょ濡れになつておまえの汚い下宿に飛び込んでいた。おまえは驚いた顔で私を迎え、私はバスタオルを借りて髪の毛を拭いた。

「風邪ひくぜ。」

おまえは突然、足元にしゃがみ込むと立つたまま片方ずつ私の足を上げさせて、靴下を脱がせに掛かった。おまえは、私の素足を両手で擦りながらそのままじっと抱えた。

「温めてやらあ。」
「あつ・・・ありがと。」

おまえの手の温もりで、私の冷えた爪先から、身体中に血潮が廻る思いがした。

「もういいの。ありがと・・・」

おまえの頭に手をやって、身を起させようとすると、おまえは立ち上りざま私の上体を抱き絞めに掛かった。おまえを退けようと、突っ張った二本の腕が哀しかった。涙がでるほど口惜しかった。あの時は、おまえが酔っていたから多少許せたが、いまは素面であるだけに許せなかった。

おまえは、男の力で私を不意に抱いたのだ。おまえの前では、ふっとしたはずみで精神の緊張を外したことに油断があった。本当は外したということではなく、不意でもなかったのかもしれない。いや、始めから、自分を支えるものは無かった。その点では油断でもなんでもなく、隠された感情の底に、抱かれないという気持ちがあったからだと思う。突っ張った二本の腕は、自分の感情すらも騙す実験の所作だったのであるまいか。感じた口惜しさは、逆の演技の結果だったに違いない。

「ずいぶん そっけないんだなあ。」

私は、おまえを軽くいなすように肩からおまえの腕を外すと、平静を装った。おまえは反応しない私に物足りない風だった。

「ちよつと悪かったかな。ゴメン！」
「そうよ。」

私はたしなめるように調子でいった直ぐそばから、おまえが私の実験に巧みに丸めこまれて行くのが齒痒かった。私の表情の中に、心を覗かせない別の演技があつたからだ。実際は、おまえに抱締められたことが、どんなに私を動揺させていたことか。

おまえにはそれが伝わっていない。おまえが、更に一步でてくれれば、私にその用意があつたことをおまえは知るまい。おまえの下宿に飛び込んだときから、その用意をして待っていたことをおまえは知るまい。

男と女が愛していれば、絆を大切にしたいと思えば、結婚という制度を無視して良いと思つていた。商品化された女の性を縛る世間の常識に、体当たりしてでも逃げなくてはいけないと思つていた。第一、女の性は男を釣上げるための商品であつて良いのか。商品化された女の性に吸い寄せられてくる男達のために、女の媚態は用意されているのか。男の性的欲望に合わせて、外見の礼儀を保護色にして、カメレオンのように女の媚態は千変万化する。女は結婚以外にいかなる性的欲望も許されず、それを息を殺して耐えるというのか。結婚制度が何と奇異な思いつきだと思えてくる。愛だとか、好きだという感情は、全く自発的な直覚力なのに、男の掌中恒久的に握られる一種の決意であるとは。非人間的な家庭の

具体物、性の奴隷を兼ねた番人になれというのか。私にはとてもなれそうにない。

私が誰にも干渉されないで借りた2DKのマンションに、おまえは何時からか転がりこんできて、私はおまえと同棲生活を始めた。おまえはそこから美容院に通つた。

「そんな青二才と同棲してどうする気なの？ ふしだらだよ。おまえは。」

嗅ぎつけた母の第一声がそれだった。郷里から駆けつけてきた母は、頑固な私に対して、罵つたり、涙を流して哀願したりしていた。母だから仕方ないと思つて我慢して聞かされていた。説得しきれないと判ると、母は洪々郷里に帰つたが、早くその美容師と別れなさいと忠告の手紙がきて、何がしかの金を送金されてきた。母という存在の不思議さを思つた。私は、誰の忠告も陰口もこたえなかつた。おまえとの生活は、「虚」を感じさせない意外性の連続だつたからだ。おまえは、先天的に女を喜ばせるコツを体得しているかのようにだつた。それと何処か漠とした危険な不安感が共存していて、それは女を不幸にしそうな因子に思えた。そのくせ女の扱い方は上手く、誰か別の女が手をとって教えたかのようにだつた。通常美容師のイメージとはまるで違つていた。店から独立して温厚な店長となれば、結婚

したがる女が寄ってくる。美容院を持つて、女に家庭生活の憧憬を与えてやれるような能力をまるで持ち合わせていなかった。あの時の一目の邂逅、私は確かにおまえに惹かれて捕まつてしまった。自分が変わっていく、どんどん変わっていく。極端に嫌いな部類の女にさせられるような。おまえのために何でもして上げたい。献身的でおいしいタイプの女に成り下がるよう不安だつた。おまえには、女に貢がせるヒモの素質があるようにも思えた。おまえの言葉に「嘘」を感じるにも拘らず、今までと違つた萎えの無いこの身内の充実感は何なのか。

「ああ このコールテンの背広、女の人からもらったんだ。」

「あの時のダンスパブのひと？」

「……」

そう無造作に言い放つて、私の顔を見た。その言葉は私を狼狽させたのだが、別に気にならないのよと平静な態度をみせたので、おまえはあっさりと続ける。

「三十歳の女の人だよ！」

その言葉は、更に酷な追い討ちをかけた。さすがにどぎまぎと狼狽する自分が悲しかった。おまえは意地悪く笑っている。美容師にありがちな女性のパトロン、私はおまえの背中にびったりとくっついて別々の女、

その女が飲み屋のママなのか、若いのか、人妻なのか、未亡人なのか・・・と思いをはせたが、その質問をさせない強引な言葉の押し売りがあった。

「叔母さんだよ 女には違いないだろう。」

そういつて面白そうに笑った。私は自分の内部の厭らしい悟気を意識したが、すつきりしたわけではなかった。この場合、男に惚れてしまうと、女の敵は男でなくなり、女になるという言葉は正に至言だった。私と寝た後にも何気なく聞いてみた。

「どうして知っていたの？」

「知っていたって？」

「おかしいわ。」

「何が・・・」

「何がって？ 何もかもが」

「誰か教えてくれる人がいたんでしょ。」

「そんな事位。」

「そんな事位・・・何よ。あたりまえだ」というの？」

「本能的なものさ、別に教えられたわけじゃないさ。」

おまえは、こんな風にとぼけてみせたが納得できなかった。過去に決定的な役割を果たした女の影を嗅ぎ取ったからだ。おまえを独占したいという、そんな弱い感情は女の何んなだろう。

おまえは、一体何を考えているのか女の

私には時々分からなくなることがある。何処へ行くのか、時に私の引出しからお金を持ち出して、店を休み忽然と雲隠れしてしまふ。前触れも無く旅行にでるのは何故なのか？行く先も告げず、帰ってきても尋ねられるまでは行つたことすら話さない。その旅行は無計画極まりない。時として、とんでもない所から電話をよこす。能登半島の禄剛崎辺りをほつつき歩き、青森の連れ込み宿に二日もごろごろしていたようなこともあつた。その度に、美容院の店長に詫びを入れるのが私の役目となつた。

こうして突飛な行動に翻弄されながら、二ヶ月経過したある日、私を更に驚かすおまえの意外な側面を発見した。唐突に小説を書き出したからだ。本当は美容師なんかでなく、小説家になりたいのだと真顔で私にいう。母親はおまえが手に職をつけることを強く望み、男の子が詩歌・小説・芸能に被れるのを極端に嫌つたという。でも隠れて中学時代から書いてきたのだという。

おまえは立上ると、真夜中の喚声とともに原稿用紙の束を天井めがけて放り上げた。五十枚程度の原稿用紙が天井に届くことなく、ばらばらになつて落ちた。私は、隣の部屋でそんなおまえの姿を蒲団の中から眺めていた。二、三枚の原稿用紙が枕元にも

飛んできた。おまえは、部屋に散らかした用紙を丹念に拾い始め、大儀そうに鼻息を荒げ、狭い四畳半を歩き廻る。鼻風邪を引いているらしく、鼻をぐすぐす言わせている。用紙を集めながら、おまえは私の枕元までやってくる。私が眼を凝らしているのに気付くと、照れたように笑つた。

「もう 寝なさいよ。」

「好きだよ。とても！」

私の勧告には無言で身を屈め、冷たい唇を額に押し当てると自分の書机に戻つてしまつた。集めた原稿用紙を、机に載せて、せかせかと痛ましいほど瞬きをして読み出していた。一通り再読すると、大きく嘆息する。考え込んでペンを執ると二、三行書き足して、またそれをペンで消す。また立上つて、原稿用紙との距離を隔てるようにして眺めている。

「もう、いいかげんで寝たら。」

おまえが私の寢床に入ってきたら、優しく抱きしめて慰めてやろうと思つていた。とりわけ髪の毛を解くのが、おまえは好き

だったから、もしおまえが要求するなら、寝る前に止めた髪の毛のピンを一つ一つ外させてもやろう。おまえが女の髪に触れる職業を選んだ理由が判る気がした。

「ほら こうすると、原稿用紙の表面が光つて書いた文字が消えるんだ。」

首を竦め、下の方から透かすようにその面を眺めたまま、どうしても観てみると私に強要してきかない。

「ほら ほら 来てごらん、光って面白いよ。この角度が重要なんだ。一寸首を上へやっただけで文字が見えてくるんだ。でもこうするともう見えない。」
仕方なく私は羽織の袖に腕をとっし、蒲団から起き上がると、蛍光灯の光で消えたり、浮かんだりする文字を並んで観なければならなかった。

そんな風にして執筆されたおまえの小説「雪」が、地方新聞の文芸欄に、第三回の懸賞小説入選作品として掲載された。それは、おまえの郷里の雪幻想を描いた私小説であった。その筋立ての中に、決定的な役割を果たした女の存在、背後霊のようにおまえに纏わり付く、不幸な母親の亡霊を垣間見たような気がした。小説を書くという能力で、未知の力で私は引つ張られ、おまえと一緒にどこまでも堕ちていくような気さえた。おまえの態度は益々横着になり、時には靴下さえも履かせてくれとばかりに、足を私の方へ投げ出したりした。幼児のようにはしゃいだかと思うと、次には憂鬱な顔になって、頑固親父のような顔でそっぽを向くような気分のムラを見せた。おまえ

にとつて、私は必要な人間であると同時に、いやそれ以上に私はおまえが必要だった。おまえは女の生存の意義をはつきりと感じさせていたからだ。今更ながら自分の直感力の正しさを認識した。私では成しえないことを見事にやり遂げる能力をおまえは備えていそうであるが、未消化の食物を反芻できないもどかしさもあつた。

おまえは、小説のなかでも生活の場において、常に女を求めていた。もつとはつきりいえば、おまえは常に女の性器を求めていた。女の性器なら誰のものでも良かったわけではない。おそらく擦れ枯らしの娼婦達の性器に、睨まれたらそれこそおまえの1物は縮み上がってしまったにちがいない。おまえは常に母親のように優しく抱かれることばかり求めていたからだ。おまえが生まれ出てきた、母親の性器と同種の性器を持つている女を捜し求めていた。もし私と同じ性器をもつ女が、他にもいることが判ればどうなっていたらだろうか。

「わたしから、離れたらダメよ。離れたらいけないのよ。」
「私によって目を覚まされたのよ。それを忘れないでね。」

寝物語に何回も聞かせた私の台詞に、おまえは何時も無言だった。その代わり、おまえはぐるっと寝返りを打って首を伸ばす

と、私のネグリジェの胸を割り、暖かい匂いの中にしゃにむに唇を押し当ててきた。

この場合、理性を制御する私の実験は何の意味も持たない。ただ、あるのは男と女の存在でおまえと私なのだ。“交わらざれば万物起こらず”の喩えの如くであつた。

このふわふわとしたこの感じは一体何だろう。身体が次第に澄んで、やがて透明人間になるみたいだ。そこにさわさわと音をたてて風が吹き抜けていくみたい。恋をすること、女は男より卑屈なものとして自己を意識しなければならぬとしたら、おまえが私を自由自在に操るとしたら、私は恋の舞台から即刻降りなければならぬのだ。おまえの動作や表情に心を配ろうと、全身の神経を総動員している私は何となく変わりようだろう。長年の実験により習熟した演技の手法をすっかり忘れ、まぐあいの快楽をすがり求める余り、つまらない自堕落な女に成り下がっていく自分が何としても情けない。下肢の虚脱した熱っぽさと、ふやけたような乳房から股へ感じる筋肉の感覚が、頭の芯の何処かでまだ疼いている。耳朶や乳房をおまえが激しく噛む痛みが余韻を引いたように蘇ってくる。それは渴望と陶酔が渾然一体となって、卑しい淫乱の咎が私を苛んでいるかのようだ。夢心地だけれど夢ではなく、おぞましい女

の業が夢のなかからそのまま這い上がって、怪しく変身して鬼と化すかのようだった。おまえは、もうその後で何時ものように寢息を立てて眠りに入っていく。私はそつと置いた手でおまえの髪を撫でていた。

地方新聞の入選を切欠にして、都内のとある同人誌の発行人から同人として参加要請があり、おまえの周りに小説を書く仲間が集まるようになった。それだけでなく、

「小説を書く美容師」の噂が口コミで広がると美容院を訪れる女客が、増えて少なからず店は繁盛した。客の髪をカットする手捌きは丁寧であつても、ニヒルな影さえ漂わせ無口で無愛想、しかも少年のように華奢なおまえが、何故有閑マダム連にモデルのか分からないと店長は良く言った。でも、おまえは今まで以上に張り切つて、そう幾分有頂天になつて美容師の仕事の傍ら、小説を何本か同人誌に発表した。

しかし私がおまえの才能に失望し始めたのは、何時頃からだつたのであるうか。でも、おまえに対する失望には繋がらなかつた。私がおまえを抱取つてやらないで、他の誰にそれができようと思つていたからだ。女の私でさえも、気付かないような見事な女の心理描写をしたかと思つと、およそ荒い文体の杜撰な構成で尻きりトンボの作品

を書いたりした。荒削りであることに未完成的の魅力を感じさせるのだが、おまえの場合は、小説を書くには絶望的な欠陥を持つているような気がした。私は、おまえの作品に無責任な評をなした地方新聞の二人の作家を恨みに思う。《二十歳前後で小説を書く、とかく無理をするもので、その年齢で自らを見詰めることができる人間は才能のある人だと思つ。その点でこの「雪」を買つ。》《「雪」はわりに好きだった。

初めのうちは、言葉づかいの点でゴタゴタしているが、女性との幻想の中をかきわけながら進んでいくにつれアリズムになり、女性のところへ着く。できれば、始めの幻想味に戻つて終わつてもらいたかつた。もつと磨きだせば、新しいものがでてくると思つ。》おまえの欠陥、おまえの気紛れの原因をはつきりと指摘するのは難しいが、何かおまえにはとうてい打ち破れない壁のようなものがあつて、それがおまえを後方に引き戻す作用を果していたのではあるまいか。おまえはその壁をはつきり理解できずに、自分の才能に不安がつていたのではあるまいか。それは、つまり美容師という職業で、自分の運命を嘆息する自己虐待にも繋がつていたようだった。もつと自分に対する思いやりの気持ちがあつたらよかつたのに……と今でも思つ。

四月に入つて直ぐ、おまえと二人で新宿御苑の五分咲きの夜桜見物をした後、ダンスパブに立ち寄つた。おまえは其処に以前から入り浸りだつていたようだが、私の場合は気分転換を兼ねたダンスは二ヶ月振りだった。黒いドアを開けて中に入れば、赤いカーペットを敷き詰めた階段が下方にのび、ホール奥の正面のボックスからアルトサクスの音が二人を襲つてきた。

ブルースを踊りながら足慣らしを終えろと、アップテンポのチャチャでたちまち何時ものパブの客に同化した。おまえは得意のジルバを踊るとき、私を反転後転やたらと廻してきた。傍らの歯を剥き出して踊る黒人カップルに対抗するような勢いで、私も嬌声を上げながら早い回転に耐えた。廻る度にスカート裾を手で押さえながら、片目をつぶり近くに寄つてくる周りの常連客とも挨拶を交わした。

曲目がルンバやサンバに変わると、周りに馴染みの若者達が寄り集まり、別の場所におまえを連れていった。ラテンを踊る時のおまえは、仲間が一目置くほど際立ち、エネルギーがシユなヒーローだった。おまえは若い仲間とラテンを、私は常連客とモダンを、夫々分かれて閉店まで踊り続けた。私の右脳が興奮し、身体の昂揚後の疲労感

で心地良かった。十二時を回る頃まで、そのホールにいただろうか。ラストダンスのワルツこそ、おまえと一緒に踊ったが、その晩は何故か自然に別れ別れになった。その日、おまえは朝まで仲間と何処かにしけ込んで帰ってこなかった。馴染の遊び仲間仲間、困まれて、小説を書くことにそろそろ限界を感じ始めていた矢意の自分から、開放された晩だったのかもしれない。

『美容師未明の交通事故死!』

厳然たる事実が今此処にある。

若い美容師が車に轢かれたことは、翌日の地方新聞が三面記事で報じた。コールトンの背広が自動車のパンパーに引つ掛けられ、五十メートルの道路を引き摺られながら、アスファルトに頭がコッソコッソとぶち当たる音を聞いたという。たまたま未明の、バイクに乗った新聞配達の初老の男はそう証言した。通報で救急車が駆け付け、おまえを病院に運んだ。事故が警察に知らされたが、撥ねた車は逃走した。警察はひき逃げ車を直ぐに手配したが、未だに犯人は捕まっていないと・・・。

櫻の散る晩春、私は自分が妊娠していることに気付いた。おまえは私の懐妊を知らずに逝ってしまったので、おまえとの実験的生活は、あつけなく半年で終わった。始

め、母に知られぬ内に、私は人工中絶で子を墮そうと決めていた。掻爬手術で、宿命的な肉厚の袋からおまえとの子を掻き出せば、全ておまえとの絆を断ち切れると思つたからだ。現在の婦人科医学の条件なら、墮胎は楽な手術のはずだ。そうした腕のたつ専門医のアドレスを熱心に調べてみた。そこでは内密のうちに、おまえの命は文字どおり掻きだされてしまつたろう。その病院では、まちがいに大切に扱つてもらえるし、やがて自分でも惚れ惚れするような健康な身体を、大学の図書館の椅子の上に取り戻すことが可能だという自信もあつた。

ところが、おまえが私に与えてくれた命を種として残すこと、つまりおまえの子を産む決心を固めたのは、一人で千鳥が淵の櫻を観に行った時のことである。曇天の薄暮の中、ただひたすら櫻の花びらが皇居のお堀の水面に舞い落ちる光景を半ば痴れ者のように安心して眺めていた。暮れ残るその光に揺れながら、まるで雪のように花弁は舞い散つていた。お堀の水に浮かぶ櫻の花弁が、水面の風に吹き寄せられてはまた一点に流れ集まる様を眺める内に何故か、涙が頬を伝わって溢れ出た。悲しいからではなく、切ないからでなく、散るがゆえに激しく燃えて華やぐ男と女の情愛、とりわけ私との出逢いの想い出、おまえの約半

年の実験のような生活が無意識に脳裏をかすめたからであつたに違いない。

《全て終わった・・・》

ふと、学生時代に好きだった西行法師の歌が口をついて出た。狂わしい程に櫻を愛し、櫻とともに生きた放浪の歌人、西行法師を羨む気持ちに底があつたかもしれない。

《ねがはくは花の下にて春死なむ》

そのきさらぎの望月の頃
千鳥が淵に咲く、染井吉野や山櫻の木々の一本一本が、平安の昔から続いてきた女の人生を暗示しているような気がした。花の寿命は短くて、開花期間は四、十日位だと聞いたことを思い出したからである。昔、母の軽蔑していった言葉でいえば、てて無し子を産むこと、つまりシングルマザーとなつて、おまえの子供と一緒に暮らす実験をまた一から始めるのが、私の定めであるような気がしたからである。溢れた涙は、千鳥が淵の櫻の女神が、はなむけに呉れた、種の存続という女の天職、懐妊という事実を成就しようという子になった、お祝いの涙であつたのかもしれない。

私は、千鳥が淵の散る櫻をぼんやりと眺めながら、これが華奢で少年のような体躯のおまえとの実験の終わりであり、また始まりなのだと思悟を決めていた。

了